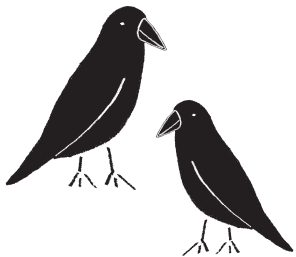


第1話
びわ泥棒



B L A C K B I R D

時計が一時を打った。

いくらか進んでいたのだろうか、ミツキの抱えていた柱時計が倉庫の中のどの時計よりも早く音をたてた。

しばらくすると、あちらこちらで低く重く、あるいは乾いた音、明快な音と、さまざまな音色が競い合うように午前一時を知らせた。

倉庫は小型飛行機がゆうに二台はおさまる広さを持っている。無数の整理棚と引き出しで埋めつくされ、壁には時計をはじめ、絵画やカレンダーやタペストリーといった、およそ壁に飾られるべきものが隙間なく掛かっていた。棚や引き出しには、この国の過去三百年の生活や風俗をいろどつた、ありとあらゆる細々としたものが保管されている。ここへ来れば、たいていのが見つかった。

たとえば、監督が「大正時代の旅行用トランク

がほしい」と云い出したら、十五分以内にこの倉庫から見つけ出して、すみやかに現場に届ける。

〈調達屋〉と、ここではそう呼ばれていた。

ミツキは東京のはずれにあるこの映画会社で、

〈調達屋〉をつづけて、じきに五年になる。

彼女がいま時計を抱えているのは、明日の午前九時からの撮影に間に合わせるためで、他にも揃えておかなければならないものがいくつもあった。あらかたは倉庫で見つかり、最後の仕上げに「クラシックで重厚な」と監督からの注釈がついた柱時計を見つけ出した。両手で大事に抱え、助監督が待機している控え室に戻るところだった。控え室といっても役者が出番を待つためのものではなく、撮影に必要な小道具を置いておく小部屋のことである。

本当を云うと、ミツキは〈大道具〉が希望だった。大がかりなセットを本物そっくりに建ちあげ、架空の街の一角を丸ごとつくり出すような、そうした仕事に憧れていた。それが、入社して最初の撮影所見学で〈小道具倉庫〉に足を踏み入れた途

端、一気に魅了されてしまった。

倉庫はひとつの大きな箱で、その中にいろいろなもの詰まっている。ミツキはそうしたものに子供のときから魅^ひかれていた。

薬箱が好きだった。ふたを開くと、色とりどりのマークや小さな文字が印刷された袋や壇^{びん}があらわれる。包帯、消毒液、目薬、絆創膏^{ばんそうこう}、オブラー
ト——子供の目には、いちいち特別なものとして映った。

そのときの魅惑と同じものが、思わず声をあげてしまうほど拡大されてそこにあった。そこには過去の時間が物に託されて保存されている。ミツキにとって〈小道具倉庫〉は三百年のあれこれが詰まった、いわば「時間の箱」であり、箱の中にはいり込むと、自分が小さな冒険者にでもなったような昂揚^{こうよう}を覚えた。そこへさらに、監督の意向に添ったものを見つけ出すゲームにも似た面白さが加わってくる——。

ひとつだけ問題だったのは、ミツキが「時間」と相性がよくないことだった。より正しく云うと、

彼女がいままさに抱えている時計というものと仲良くできない。やわらかく云つても、時計は敵だった。理由ははっきりしている。彼女ののんびりした性格がもたらす体内時計と、世の中のせわしない——と彼女は感じる——時計とがまったく相容れなかった。だから、監督が指定してくるしめきりの厳しさに、たびたび閉口した。

ぼうん、とひとつ、倉庫のどこかでまた時計が午前一時を打った。たぶん、倉庫内でいちばん遅れている時計だ。

——あの時計が、わたしだな。

ミツキは時計を抱えなおして息をついた。

*

「あ、まだあるんだけど——」

ミツキは無事、助監督の水島みずしまに柱時計を渡し、「じゃあ、明日」と帰りかけたところで引きとめられた。

「だって、いただいたリストはこれで全部じゃな

いですか」

「追加が出ちゃったんだよ。やっぱり午前九時までにね、新鮮なびわを、ひと房でいいんだけど」

「びわ——ですか」

「わかる？ 果物のびわだよ。楽器の琵琶びわじゃなくってね」

「それはわかりますけど」

そう答えたが、ミツキはこれまでにびわを買ったことがなかった。少なくとも調達したことはなし、個人的に果物屋やスーパーで買った記憶もない。

食べたことはあった。しかし、いつどこで食べたのか、それがどんな味であったか、となるとまるで思い出せない。

この仕事をしていると、つくづく思い知らされる。自分のこれまでの人生がどんなものであったか、自分がこれまで何と関わりかか、何と関わらなかったか——。

たとえば、圧力鍋あつりよくなべである。シルク・ハットである。一輪車である。監督のもとにに応じて探した

それらの品々について、自分はまったくもって無知だった。二十七年も生きてきたのに何も知らなかった。

びわにしても同じである。じきに夏が始まるうとしてこの季節にはいるのか——まずもって、それが判^{わか}らない。

「ちよつと調べてみたんだけどね」

水島がミツキの思いを見透かしたように云った。「あくまでネットの情報だけど、季節的にはぎりぎり売つてるところもあるみたいだよ」

「あ、そうなんですな」とミツキは声が華やいだ。「ただ、東京ではどうかなあ」

水島は苦笑していた。このひとが苦笑するときは何かしらスムーズにいかないことを意味している。つまり、びわを探すことの困難さをその苦笑が予告していた。

「それに、そもそも時間が——」ミツキは肩を落とした。

「だよなあ。こんな時間に開いている果物屋はそうそうないだろうし、てことは深夜営業のスーパー

ーを見てまわるしかないけど、最近はめつきり減ったし」

水島の言葉に黙って頷いた。うなず世の中が繁昌はんじょうしていたときは終夜営業の店が至るところにあった。水島の云うとおり、その数がぼろぼろとこぼれ落ちるように減っている。

「なんかさ」水島はミツキではなく自分に云い聞かせるように小声になった。

「さみしいことになってきたよな、東京の夜も」

*

照明を半分におとした営業所の休憩室で、松井まついは缶コーヒーを飲みながら勤務にそなえていた。

松井がつとめているタクシー会社は「ブラックバード」といって、夕方から早朝までを専門とする夜のタクシーである。車体の色は黒に近い濃紺で、運転手も黒を基調とした制服を着ている。小さな会社なので保有台数も少なく、顧客から予約を受けて走るのが主だったが、このごろはそうし

た客がぐんと減っていた。流して客をひろうことが増え、松井は白紙のままの予約表を制服のポケットにしまつて、くしゃみをひとつした。

誰か噂うわさでもしてるのかな——それならいいんだけど。

もし、こんな夜おそくに松井の噂をする者があるとすれば、それはお客さんに違いない。他に自分の噂をする者が思いつかなかった。気づけば独身のまま六十代を迎え、家族というものと縁遠く過ごしてきた。東京生まれなので盆暮れに帰る郷里もなく、両親を早くに亡くし、兄弟もなかった。つまらない男だな、と自分でも思う。

「松井さんはどうしてドライバーに？」と同僚に訊きかれても、「いや、なんとなく」としか答えなかった。

しかし、これにはちよつとした理由がある。

子供のころに、たまたま図書館で『車のいろは空のいろ』という童話を見つけたのがきっかけだった。その主人公がタクシーの運転手みょうしで、苗字みょうしが自分と同じ松井だった。主人公の松井さんは、と

きに熊や狐きつねといったおかしな客を乗せて車を走らせる。タクシーの運転手というのはこんな楽しんで仕事なのかと夢中になって読んだ。

読み終わって本を閉じ、あらためて表紙をながめると、明るいブルー——空色のタクシーに乗った松井さんが描かれていた。

これだ、と思った。自分はこのひとになるのだ、と。

そのとおりになった。ただ、この四十年間、いくつかの会社を転々として、その都度、車体の色も移り変わったが、いまのところ空色の車にはめぐりあっていない。

休憩室を出た松井は車庫にとめられた車に向かつてまっすぐ歩いた。明るいブルーではなく、ほとんど黒と云っている濃厚なブルーである。車庫とはいつでも屋根のない吹きさらしで、見上げれば空が見え、バナナによく似たかたちの月が出ていた。星は——かろうじて見える。いつもと同じしよぼくれた東京の星だ。

「ん？」と松井はそこで気がついた。

この車体の色は、夜空の色によく似ている。

「車のいろは夜空のいろ、か」

そうつぶやいたとき、携帯電話の呼び出し音が鳴り、松井は素早くポケットから取り出して画面を見た。

無機質に並んだ十一桁けたの番号の下に、「ミツキさん」と出ていた。

*

ああ、やっぱり松井さんをお願いするしかないか、とミツキは何度か電話をしかけた。

でも、いつも松井さんに助けってもらって、自分ひとりでは何もできないというのは、いかなものだろう。

いったん耳にあてた携帯をおろし、急いで「切」のボタンを押したときに、左の薬指に光る指輪に目がとまった。

「ああ」と声が出る。

指輪は浩一こういちから贈られたものだった。

つい三日前のこと、ミツキはようやく休みがとれて、恋人の浩一とひさしぶりに会った。

「ごめんなさい」「今週も休みがとれないの」「とにかく忙しくて」「すみません」「来週かならずね」

この一カ月、「会いましょう」と電話をもらうたび断りつづけていた。忙しかったのは本当だったが、会うのを引き延ばしていたのは、もうひとつ理由がある。

指輪のサイズを訊かれたのだ。「薬指の」と浩一は云ったが、「婚約」のふた文字はこれまで口にしたことがなかった。浩一にはそういうところがある。ミツキはそれが気に入らない。

彼はミツキより三つ歳下で、「まるでそんなことを感じさせない」と云いたいところだったが、事實は逆だった。生まれながらの弟的性格で、ミツキに甘えたり頼ったり、「支えてほしいんです」とはつきりそう云ったこともある。

「いいじゃない、可愛くて」

友人の愛子あいこはそう云うが、ミツキは早くに父親

を亡くしたせいとか、自分の方が男性に甘えたかった。

「じゃあ、別れちゃいなさい」

自分の性格を考えたら、愛子の云っていることはきつと正しい。しかし、ミツキは浩一いちぢずの一途な思いに心動かされていた。一途な思いと云っても、ミツキに対するものではない。

「カラスがですね——」

彼は約束の時間に十分おくれてやって来た。場所は新宿のホテルの最上階にあるレストランで、それは二人にとって、ほとんど初めての贅沢ぜいたくだった。窓の外に東京の夜景がひろがり、まるで空の上で食事をする心地だった。

「カラスが本棚をつくっちゃったもんですから」
突然、わけの判らないことを言い出すのはいつものことで、ミツキはそういうとき、賢い姉を演じて、彼が何を云いたいのか、少しずつほぐすように聞き出した。

「本棚って？」

「いや、老いたカラスが本をあつめてきました

「どいへ？」

「本棚へです。クヌギの木の上に材木だのなんだのを運んでは自分で器用に棚をつくって、何をするんだらうって観察していたら、ゴミ捨て場から持ってきた本や雑誌を並べ始めたんです。頭がいんですよ、あいつ」

浩一は都の環境局によってつくられた「カラス対策プロジェクト」の外部スタッフだった。「自称」と付け加えた方がいいかもしれない。正式に名を連ねているわけではなく、彼の本当の仕事は新聞配達だった。早朝の街なかで新聞を配ってまわるうち、カラスの存在が気になり出してその生息を観察するようになった。名前こそ連ねていないが、長年にわたって観察してきた経験と知識が買われて意見をもとめられるようになった。

彼が住むアパートのすぐ近くに森を擁した公園がある。その森がそのあたりのカラスたちのねぐらになっていた。公園のすぐ横には私鉄電車が走り、駅の構内に置いてあるフリーペーパーの編集

部から連絡があつて、浩一は取材を受けたことがある。その取材がきつかけで、彼は「街のカラス博士」と呼ばれるようになった。このとき、取材の助手をつとめたのがミツキで、学生のアルバイトで経験も浅く、編集部の先輩と一緒に話を聞いて、拙い記事を書いた。

それが出会いだつた。だから、ずいぶん長いつきあいになる。が、ミツキにしてみれば、学生のとくと二人の関係はさして変わらなかつた。支離滅裂になりがちな話に道筋をつけて聞き出すのは取材のときと同じで、わざわざ、高級ホテルのレストランに一張羅のスーツを着てやって来たのに、彼はミツキに手渡すもののも忘れて、カラスが木の上につくつた本棚のことを延々と話した。

「ねえ、あのさ」

ひととおり食事が終わり、デザートがテーブルに届いたのを見計らつて、ミツキは浩一の話を制した。

「今日は、なにかお話があるんじゃないやなかつたわけ？」

本当はそんな予告はなかったのだが、葉指のサイズを訊かれてホテルの最上階に招待されたのだから、きつと「そういうことに違いない」とミツキは心の準備をしていた。

「あ、そうだ」

彼は思い出したように上着の内ポケットを探り、「忘れるところでした」と云いながら、白いリボンが結ばれた赤い小箱を差し出した。

それだけだった。

それ以上のことを彼は口にせず、あまりの歯がゆさに、ミツキはそれが何であるか知っているのに、

「なに、これ」

とぶつきらぼうにこた応えた。そっけなくリボンを解き、キャラメルの箱でもあけるような手つきでふたをひらくと、「なに、これ」ともういちど繰り返した。さらりと指輪を取り出し、取り出した勢いのまま左の葉指に通すと、冗談でそうしただけ、というふうにミツキはすぐに指輪をはずそうとした。

しかし、びくともしなかった。

あれ？ と浩一に気づかれられないよう首を傾げ、それとなく力をこめて抜こうとしたが、まったく動かない。

本当はすぐに指輪を抜いて、「これがなんなのかちゃんと説明してくれないと、わたし、受け取れません」そう云うつもりだった。が、抜けなくなってしまったら話にならない。

思いきり力を入れてみたが抜けず、指輪は生きもののようにミツキの薬指にしがみついていた。

*

松井が「貸切」の表示を光らせて指定の場所にたどり着くと、ミツキはスーパー・マーケットのネオンを背にして口をとがらせていた。

「もう、参っちゃった」

そう云いながら乗り込んできたミツキに、松井はバックミラー越しに「どうしました？」と訊ねた。

「ここでもう六軒目なんです。深夜営業のスーパーめぐり。でもこのスーパー、運良く果物を仕入れていている担当の方がいらっしやって、どこか売ってるところはないですかねえ、って訊いたら、残念ですけど、東京の店にはどこへ行っても並んでないでしようって——」

「果物？——ですか」

なんのことを云っているのか判らなくて松井は面食らったが、こんなふうにはミツキに呼び出されるのは、いまに始まったことではない。たいてい朝まで貸し切りで、そういう意味では松井にとつて数少ない上客だった。

「わたし、松井さんに頼ってばかりでなんだか申し訳なくて、今日ばかりはなんとか自力で探し出したかと思っただけですけど——やっぱり駄目みたい」

「今度は何を調達しなくちゃならないんです？」

「びわ、なんです。楽器じゃなくて果物の。で、果物って云ったら、前に松井さんに頼んで——あのときもやっぱり季節はずれだったけど、東京中

を走りまわって青りんごを探し出してくれたでしよう?」

「ああ、あのときは大変でした」

言葉とは裏腹に松井はいかにも嬉しうれそうだった。

「しかし、どこへ行っても並んでいないと聞いてしまったら、どこへ行ってもいいか判りませんねえ」

そう云いながら松井は車を走らせ、

「とりあえず、どうしましょう?」

バックミラーの中のミツキを窺うかがうと、彼女はうつむいて眉まゆをひそめ、しきりに指の付け根をもみほぐすような仕草をしていた。

「ああ、とれない」とため息まじりにつぶやいている。

松井はフロントガラスに視線を移し、

「店に並んでいないとなると——東京から離れませんか」

離れるなら北か西だが、どちらへ行ったらいいのだろうと頭の中に地図を描きながら大通りへ出た。今日は道が空いている。バイクが一台、気持

ち良さそうにスピードをあげて、かたわらを追い越していった。

「あ、ちょっと待ってください」

ミツキは指輪から手をはなし、携帯に届いたメールをチェックして、「ふうん」と大きく頷いた。

「どうしました?」

「ええとですね」メールの画面を睨みながらミツキが読みあげた。「桜谷の交差点?——つてここから遠いですか」

「いや、十五分とかからないと思いますね」

「その交差点から深川町の方へ五十メートルくらい行ったところにある進行方向左側の街路樹——

それがじつは、びわの木で、昨日確認した時点では、びわが実っていた——らしいです」

「ほう。それはまた詳しい情報ですね」

松井も驚いた様子だったが、本当に驚いたのはミツキだった。まさか、こんな返事がもらえると
は思わず、軽い気持ちで、「びわを探しているんだけど、どこにあるか知らない?」と浩一にメールを送ったのである。一応、念のため送ってみた

だけで、返事はまったく期待していなかった。

「起きてたの？」と急いで返信すると、

「これから配達に行くところですよ」と返事がきた。

「どうして、びわの木のことを？」と返すと、

「あのあたりのカラスが、そのびわが熟すのを狙っているのです」と返ってきた。

なるほどこういうこともあるのかとミツキは感心した。

浩一君は、たぶんカラス以外のことにほとんど興味がない。これまでの人生であなたは何に関わってきたかと訊かれたら、はたして「カラス」以外に答えるものがあるのだろうか。

たぶん彼は圧力鍋やシルク・ハットや一輪車と無縁に生きてきた。びわだって、食べたことがあるかどうかも怪しい。

でも、もしかすると、人はひとつのことを極めると、そこからあらゆるものにつながってゆくのかも知れない。なにひとつ知らなくても、こうしてカラスがびわの在処あつかを教えてくれるのだから

「ふうん」とミツキが感心していると、そのうち、車が桜谷の交差点に近づいてきたらしい。

「そろそろですね」

松井さんの声にはつとなり、ミツキは窓に顔を押しつけて沿道の街路樹をひとつひとつ確認していった。

が、考えてみると、びわの木がどんなものなのかミツキは知らなかった。ましてや夜の夜中である。どうにか街灯に照らされているので、もし、びわが実っていればその色で判るだろうが、浩一君に教わったあたりで車を降り、あとはじっくり歩いて探した方がいいかもしれない――。

そうすることにした。

「じゃあ、私はここで待ってます」

松井さんは路肩に車を寄せて停め、ミツキは歩道に降りると、街路樹を見上げながら歩き出した。だが、すぐには見つからない。

ミツキは自分の記憶にあるびわの実の色が本当に正しいかどうか疑い出した。たしか、淡いオレンジ色のはずだ。店で売られているものは間違い

なくそうだが、もしかして、木になっているときは違う色なのかもしれない。たとえば、木になっているときは若草色だが、枝からはなれてしばらくするとオレンジ色に変色するとか――。

いや、ありうる、といまいちど目をこらして頭上の木々を見上げたとき、視界の端にオレンジ色がよぎり、「あつた」と声をあげた瞬間、オレンジ色が黒々としたものに隠れて見えなくなった。印象としては、黒々としたものがオレンジ色の実をパクリとやったかのようだ。

もしかして、カラス？ とミツキは身構えた。カラスよ、きつと。そうに違いない。木にしがみつくようにして、信じられないくらい大きなカラスがオレンジ色の実をつぎつぎと食い散らかしている。

いや、ちょっと待って。いくらなんでもあんなに大きなカラスがいるはずがない――ミツキがそう思いなおしたとき、折よく車道を大型トラックが通り過ぎ、やけに明るいヘッドライトがあたりを照らして、黒々としたものの正体を明かした。

人間である。

黒い上着を着た黒髪の——男ではない。女のひとだった。

「あの」とミツキは思いきって声をかけた。一瞬、背筋を寒いものが走り抜けたが、しだいに暗さに目が慣れてくると、背の高いすらりとした女性がさらに木の上に登りかけている姿がはつきりと見えた。

「あの、すみません。そこで何をしていらっしやるのでしょう」

いきなり声をかけられて、そのひとは戸惑ったようだったが、声をかけられたことはこれまでも何度かあったのだらう。ミツキに向かって迷わず答えた。

「びわ泥棒よ」

*

午前三時半になっていた。

「すぐそこですから、ちよつと寄っていきません

か」

黒い上着の中に隠し入れたものは、まさに絵に描いたような立派なびわで、ミツキはもちろん警戒したが、背に腹は代えられない。どうしてもそれがほしかった。松井さんが一緒なら平気だろうと肝を据え、「びわ泥棒」を名乗った女性が住むアパートの一室に誘われるままついていった。

「どうぞ」

台所のテーブルにグラスが置かれ、道すがら聞かされた黄金色のびわ酒が音をたてて注がれた。

「これが去年のいまごろ仕込んだものです」

びわ泥棒は艶つやのあるいい声でそう云った。毎年いまごろ夜中に木に登り、どうせカラスに食べられてしまうなら、とその前にこうして収穫して酒を仕込むのだという。

「弟がずっとそうしていたんです」

食器棚の隅に置かれた写真立てに目を向けると、彼女よりずいぶんと若い、しかし彼女によく似た青年が写真の中で笑っていた。

「でも」と彼女はミツキを見て笑みを浮かべた。

「このひと房が、そのうち、スクリーンに映し出されるわけでしょう？」

ひと房でいいので譲ってください、というミツキの申し出に彼女は「いいですよ」と快く応じてくれた。話を聞くなり〈調達屋〉というミツキの肩書きを面白がり、「このびわが映画に出演するわけね」と正しく理解していた。

「しよせん泥棒したものですからね、どうぞ、ひと房といわず、好きなだけ持って行ってください。来年のお酒がちょっと少なくなるけど、その分、映画を観る楽しみができるし」

彼女は自らを「びわ泥棒」と称し、たしかに彼女のしたことを考えれば間違いではない。が、年に一度のそのささやかな犯罪を除けば、いたって生真面目きまじめに忙しく日々を送っていた。黒い上着の下に弟が遺した白いシャツを着て、化粧は控え目だったが、日本人ばなれした目鼻立ちをしている。しかし、その美貌びぼうを誇ることなく夜中の仕事をほとんど休みなくこなしていた。

今日はたまたま「びわ泥棒」のために休みをも

らっていたが、いつもなら、この深夜の時間は都内某所にあるオペレーター・ルームで絶え間なくかかってくる電話に応えている。

「相手は匿名の老若男女で、とぼけた人生相談から切実な生き死にの問題まで、どんなことでも話し相手になるの」

道理で、とミツキは納得した。初対面なのに警戒を解いてしまったのは、その声のせいだった。

「〈東京03相談室〉っていうの。もし、なんかあったら、いつでもここへ電話して」

ミツキに名刺を渡した。

「調達のお手伝いもできるかもしれないし、もちろん、色恋沙汰ざたから家族の問題まで、なんでもOKです」

びわ酒は甘みと酸味がせめぎあう複雑な味がした。

ミツキはその複雑さに目を閉じ、松井はまだ仕事中心なので、舌先でちろりと舐なめて芳香を楽しんだ。

*

「ねえ、松井さん」

ミツキはタクシーの後部座席に深々と身を沈めると、譲ってもらったひと房のびわを膝ひざの上に置いて云った。

「わたし、たぶんもう眠っちゃいます」

びわ酒が効いてきたのか、甘い眠気が体の隅々までいき渡っていた。

「かしこまりました。どうぞ、お眠りください。

お部屋までお届けしますから」

「そうじゃないの。アパートに帰って布団にはいったら、きつと起きられなくなるから、このまましばらく夜が明けるまで走りつづけてください」

「かしこまりました」

松井はバックミラーの中に見ていた。

すでに目を閉じたミツキが左手の薬指に光る指輪に触れ、指先でその表面をそつと撫なでると、天使のように無邪気な顔になって寝息をたて始めた。

東京もまた、短い眠りの中にあつた。

すべてが夜に守られて寝静まる中、びわの実だ

けが月の光にやわらかく映えていた。